

2022.12

vol.40

宮城県内外の
生活支援コーディネーターと
協議体の取り組みを発信

MiYAGi

ま
ち
づ
く
り
と
地
域
支
え
合
い

大崎市の第2層協議体の一つ
「鳴子地域支え合い推進会議」と
生活支援コーディネーターの
高橋章浩さん
(2022年11月22日、大崎市鳴子総合支所)

令和4年度 宮城県生活支援コーディネーター養成研修 ～受講者の声～

本年度の宮城県生活支援コーディネーター養成研修は、8月～11月に2コース（各3回）を実施しました。3回目の研修アンケートから、受講者の声を抜粋してご紹介します。

生活支援コーディネーターや初任の行政担当者等を対象とする【地域づくり推進コース（基本コース）】の受講者は、地域包括支援センターに所属する人が最も多く、全体の約50%が生活支援コーディネーターとして就業。「生活支援コーディネーターとしてもつべき着眼点が参考になった」「協議体は『会議』ではないこと、コーディネーターは動く協議体であることがわかった」「専門職としての視点にとらわれすぎず、地域にさまざまな味方をつくりたい」などの意見がありました。

また、行政担当者や中堅の生活支援コーディネーター等を対象とする【現状分析・課題解決コース（実践コース）】の受講者は、市区町村社会福祉協議会所属が多く、全体の80%が生活支援コーディネーターとして就業。「伴走型支援に取り組む長野県の実践発表が参考になった」「演習で、地域性や立場の違う人と意見交換ができ、目指すところは同じだとわかって元気をもらえた」「地域づくりは一人ではできない。自分は関係者と意識合わせができていのかを振り返ることができた」などの意見がありました。

両コースとも2回はオンライン開催となりましたが、3回目は対面での集合研修で開催。集合研修について「演習は対面のほうが話が弾む」「実践発表者の姿から学びが多く、対面開催のよさだと感じた」という声とともに、移動時間の削減や所属法人のコロナ対策としてオンラインを希望する声も寄せられました。

今後の予定

【全体研修】〈地域包括ケアの推進と地域支え合いの在り方〉

対象：関心のある方はどなたでもご参加いただけます。
自治体を通じて参加をお申し込みください。

日時：2月27日（月）10:00～16:00
会場：フォレスト仙台
（仙台市青葉区柏木1-2-45）



生活支援

コーディネーターに聞く

まちづくりの

今

17

大崎市鳴子地域

大崎市鳴子温泉

協議体で「地域のつながり」模索

課題解決訴え「大炎上」

「誰もが暮らしやすい地域づくりをしないと、鳴子はたいへんなことになってしまふ」

率直に危機感を表すのは、大崎市鳴子温泉で地域支援コーディネーター（第2層生活支援コーディネーター）を務める高橋章浩さん。

高橋さんは2016年度半ばから18年度末までの約2年半は、鳴子まちづくり協議会で鳴子温泉地区全域を対象に活動。続いて20年2月以降は、鳴子地域づくり委員会（以下、地域委）に所属し、地区内5地域のうち鳴子地域で活動している（解説欄参照）

「当初は地域づくりの必要性が住民にうまく伝わらず、苦労しました。最近ようやく理解や共感が得られるようになってきました」

20年8月に第2層協議体「鳴子地域支え合い推進会議」を設立。会合は22年11月までに5回を数える。並行して情報紙「なるこ地域づくりと地域支

え合い」や、地域委の会報「はなぶち」を発行し、域内全戸に配布。協議体と情報紙で、地域づくりとは何か、なぜ必要かについての情報の発信・共有に注力する。

「まずは理解と共感を広めることが、大事です」

鳴子と言えはこけしや温泉で知られる全国有数の観光地だが、近年観光客数は低迷。人口の減少と高齢化も続いている。誰にも看取られずに亡くなったたり、「ずっと鳴子に」と願いながら介護の都合でやむなく遠方に転居する高齢者を、高橋さんは数多く見てきた。近ごろは子ども、若者、中年のひきこもりや孤立も目につくようになった。

コーディネーターに就任してすぐ、地域を歩きまわり、住民の声に耳を傾け、生活課題を洗い出していた。そのなかで、移動販売と介護予防サロンを組み合わせるといったことも試みている。

活動開始から数か月後、ある町内会の役員らを集め、生活支援体制整備事業と地域づくりに関する説明会を開いた。高橋さんは地域の生活課題を挙げ、住民自ら解決に取り組みむべきと説いた。それが思わぬ反発を招く。

「大炎上でした。そんなのは行政の仕事だろうとか、これ以上私たち住民に何をやらせるつもりだとか……」

地域には、住民が長く培ってきた

大崎市

【おおさきし】人口12万5843人、5万2789世帯、高齢化率31.3%（2022年10月1日）。市域は合併前の旧市町7地区、11中学校区、22小学校区、363行政区で構成。第2層圏域は7地区の「まちづくり協議会」と、小学校区かさらに小さい範囲の「地域づくり委員会」（34か所）の活動エリア。協議会と委員会は2006年の市町合併後、新たな住民自治組織として発足。必要に応じて生活支援体制整備事業を受託し、地域支援コーディネーターの名称で生活支援コーディネーターを配置できる。第1層は、同事業を所管する市社会福祉課地域包括ケア推進室が、組織としてコーディネーター機能を持つ

鳴子温泉地区

【なるこおんせんちく】旧鳴子町。人口5213人、2520世帯、高齢化率50.5%（同）。地区全域をカバーする「鳴子まちづくり協議会」と、川渡（かわたび）・東鳴子・鳴子・中山・鬼首（おにこうべ）の5地域それぞれの「地域づくり委員会」がある。生活支援体制整備事業は、まず協議会が2016年11月～2019年3月に実施し、地域支援コーディネーターを配置。次いで2019年12月、5つの委員会のうち「鳴子地域づくり委員会」が実施、翌年2月にコーディネーターを配置し現在に至る。「鳴子地域」は、JR鳴子温泉駅周辺の6行政区12町内会（1372人、767世帯）で構成



たか はし あき ひろ
高橋章浩さん

第2層生活支援コーディネーターの高橋章浩さん
（鳴子総合支所会議室で）



第5回の鳴子地域支え合い推進会議でのグループワークの発表(2022年11月22日、鳴子総合支所)

ながりがある。有償・無償の生活支援サービスはなくとも、さりげなく近隣の高齢者を見守り、困っていると気づけば放っておかない。それを差し置いて課題が強調され、解決を求められた住民は不満を爆発させた。

「いまあるつながりや、できている支え合いをきちんと評価すべきでし

「考えたり、話し合ったり」

た。とはいえ、支援が必要な高齢者は増え、地域のつながりは弱まっています。何とかしないと」

高橋さんによると、かつて地区の全域に「葬式手伝い」の習慣があった。亡くなった人がいれば、その家に近隣住民が集合。祭壇を設え、膳を用意し、弔問を受け付ける。日中仕事を休めない人は夕方以降、弔問客の靴を整理する「下足番」の役が与えられた。

「葬式手伝いは地域支え合いの原点。葬式は誰もが役割を持って参加するサロンで、とても重要なつながりづくりの場でした」

また、地区内の各所に町内会などが運営する共同浴場がある。それも住民交流や見守り、つながりづくりに大いに役立ってきた。

「どこの誰が具合が悪いとか、入院した、退院したなどの情報は、共同浴場ですぐ共有され、見守りなどに生かされています」

共同浴場に通う一人暮らし女性が、ある日脳梗塞を発症。入浴やお茶飲みの仲間がすぐ異変に気づいて家を訪ね、倒れているのを発見。一命を取り留めた——そうした事例は枚挙にいとまがない。

「そのような緊急時の対応だけでなく、日頃の買いものや通院で車に乗せてあげるとか、冬なら雪かきやストーブの給油をしてあげるといったことは、よくあります」

一方で、社会情勢は変化。葬儀は業者への依頼が一般的になり、近隣の手伝いは消えつつある。共同浴場も人口減につれて一人当たりの維持費負担が重くなり、将来的に存続が危ぶまれる状況だ。

昔ながらの葬儀の復活は現実的ではなく、人口を増やす妙案もない。それでも、近隣同士のお茶飲みや共同浴場での交流、商店となじみ客の親しい関係など、見守りや支え合いの基盤となるつながりや生活文化は、まだ残っている。

「いまあるつながりを把握し、その成り立ちや重要性を理解して、私たち一人ひとりが自分にふさわしい、新たなつながりづくりを考えたり、話し合ったりすることが必要。体操やグラウンド・ゴルフでも気軽に掛け合う関係は築けます。鳴子では、コンビニでも店員と常連客が親しく言葉を交わします」

その「考えたり、話し合ったり」に協議体を活用している。協議体メンバーは現在約30人。地域委の役員や地域づくりに興味を持つ住民、社会福祉協議会と地域包括支援センターの職員、市の事業担当

者、警察、消防、郵便局、コンビニとその運営会社も加わっている。20年度の第1、2回会合は、主にメンバー間の情報・意見の交換。21、22年度の第3、5回は、県の生活支援コーディネーター養成研修の講師陣を招き、研修を行った。地域包括ケアの基本的な考え方を学んだほか、「いまあるつながりと支え合い」を掘り起こし、それを生かす地域づくりのあり方などを話し合った。

22年11月22日の第5回会合では、孤立傾向の一人暮らし高齢男性の見守りをテーマに、グループワークもしている。男性が失ったつながりを回復させる方策や、趣味や特技で社会参加を促すさまざまなアイデアが出された。この会合に、かつて「大炎上」した町内会の役員も招かれた。役員は閉会后、「いい話し合いだった」と満足げに語っている。

高橋さんは鳴子温泉出身、在住の58歳。市外の音響機器メーカーに30年勤務したあと、地元で郵便配達に従事。地区の生活課題を感じ取り、自ら志願して地域支援コーディネーターに。趣味は料理、みこし担ぎなど。座右の銘は「仁」で、自他への分け隔てない優しさを旨とする。古くからのつながりを見直し、新しいつながりの形を探す、その取り組みの基礎に、仁の心構えがある。

利

地域づくりと個人情報の扱いを学ぶ（岩沼市玉浦地区）〈11月17日〉

岩沼市の玉浦小学校区（第2層）を担当するマリンホーム地域包括支援センターが11月17日、地域づくりと個人情報の扱いをテーマに玉浦コミュニティセンターで研修会を開き、町内会長、区長、民生・児童委員、生活支援コーディネーターなど計23人が参加。

講師は、仙台白百合女子大学の志水田鶴子准教授＝写真＝が務めました。

志水准教授は「高齢でも安心して暮らせる地域づくりは、親しい人同士の気に掛け合いや支え合いが基本」とし、生活支援をあまり大げさに捉えず、地域住民のつながりを生かすべきと訴えました。続けて保護が必要な個人情報や要配慮情報（病歴や障害の有無など）を説明し、次のように述べています。

「本人が開示する情報も多い。それをどんな範囲でどう扱うかを周囲が共有すること」「配慮が必要な人に関する情報は、必ずしも町内会単位で把握せず、『あの人に聞けばわ

かる』といった程度でもいい。それを災害時にも活用したい」「見ず知らずの人に助けるとは言えない。普段からのつながりづくりが大事」。

今回の研修会は、県地域支え合い・生活支援連絡会議のアドバイザー派遣事業を活用。事前に志水準教授と同地域包括支援センターの生活支援コーディネーター、連絡会議事務局（県社協）が協議し、テーマや内容を決定しました。



宮城県地域支え合い・生活支援推進連絡会議事務局（宮城県社会福祉協議会）
〈2022年11月期〉



コロナ乗り越えお宝発表会（色麻町、七ヶ浜町）〈11月18、25日〉

地域づくりの実践や住民同士のつながり・支え合いを称える「地域のお宝発表会」が、11月も各地で開かれました。

18日に色麻町で、町と町社協が前年度に続き2回目のお宝発表会を町農村環境改善センターで開催。町老人クラブ連合会のイメージアップ作戦をはじめ、コロナ下で始まった高齢者世帯への訪問活動、80歳代のアマチュア無線愛好家の地域貢献、集落の除雪や農業振興に取り組む男性グループ、93歳の一人暮らし女性宅でのお茶飲みなど5つの活動を紹介しました。

七ヶ浜町では25日、七ヶ浜国際村を会場にお宝発表会が開かれています。町と第1層協議体委員、町社協の3者共催。孤立防止と健康づくりを目的としたサロン、交流イベント、スポーツ活動のほか、高齢世帯の見守りなどにも取り組む3地区（遠山、境山、汐見台）の地区社協やボランティアグループが、それぞれの活動を発表しました。同町の発表会は、コロナ感染拡大に伴う中止を経て今回が3年ぶり2回目。



七ヶ浜町お宝発表会（11月25日）



色麻町お宝発表会（11月18日）

問い合わせや情報提供はお気軽に事務局まで

電話022-266-2621
担当:佐藤正、菱沼菜

住み慣れた地域で暮らし続けるためのお宝探し情報紙

Miyagi まちづくりと地域支え合いvol.40

バックナンバーがホームページで読めます http://www.clc-japan.com/sasaeai_m/

発行日 2022年12月30日

発行 宮城県保健福祉部長寿社会政策課

編集 特定非営利活動法人全国コミュニティライフサポートセンター（CLC）